

美術品修復の現場から

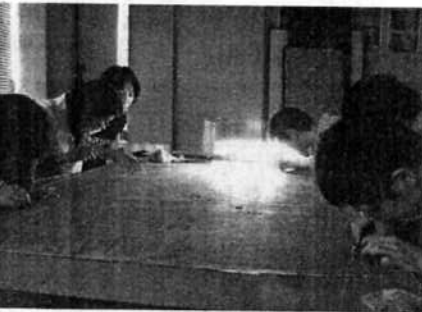


吉備国際大学教授
馬場 秀雄氏

脚絵・書の保存修復研究に取組んでいます。◆ゼミ生が「虎・竹林図」を処置

この春には、私が担当している東洋美術修復研究室（馬場ゼミ）から初風などから鑑賞できる部分を切り接ぎして作られています。卒業研

めました。この「虎・竹林図」の虎は御城下を夜な夜な徘徊した逸話が残る作品です。衝立の画面（虎・竹林）とも、元は襖か屏



本紙だけの状態になるまでピンセットで旧裏打を取り除く地道な作業

料紙（画用紙）に描かれたことが判明しました。つぎに、非破壊分析の実測時間において、可視・近赤外反射スペクトル、三次元蛍光スペクトル、蛍光X線分析を行い、藍・靑・鉛白などの絵の具が使用されていることが分かりました。◆「衝立」になったのは昭和初期とくに目標では同僚胡粉の使用を推測していた子虎の耳部分の絵の具が蛍光X線分析の結果、

修復過程にも多くの情報

吉備国際大学に勤務してはやる度目の春を迎えます。藩政時代には備中松山藩の城下町として栄え、現在も日本、高い

ところに残存する松山城や武家屋敷、商家おまじの寺に江戸時代より伝わる、一虎・竹林図（現在は衝立の形態）に対して、ゼミ生が共同で保存修復処置を施し、その成果を卒業論文としてまと

突として、高梁市和田町の曹洞宗玉雲山・定林寺に江戸時代より伝わる、一虎・竹林図（現在は衝立の形態）に対して、ゼミ生が共同で保存修復処置を施し、その成果を卒業論文としてまと

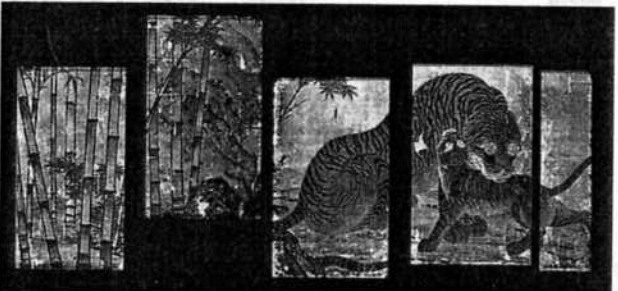
ら拍物や欠損が多く見られます。この度、お寺の保存修復作品として提供

◆歴史と保存科学の視点
学生たちは自分たちが4年間学んだこの高梁の地に伝わる、本物の作品を前にして、改めて町の歴史や寺院について勉強しました。まず修復作品をじっくりと観察して調査記録をとり、修復処置を単なる手仕事としてとらえるのではなく、美術史的な考え方と保存科学的な視点に基づいて、学生たちが主体的に修復設計書を作成して保存修復を進めました。すると、いくつかの情報を得ることが出来ました。

鉛が検出され、これが鉛白であることが判明しました。変色や退色しやすい鉛白がよく残っており、筆者の絵の具を溶くことがたどたどしくなっています。技術の確かさに感心します。



修復前の「虎・竹林図」。欠損、擦り傷、退色などが現われ、鑑賞部分の切り接ぎがなされている



「虎・竹林図」をパソコンで画像復元すると、被絵などの連続する一つの作品の可能性が推測される

していただきました。◆歴史と保存科学の視点
学生たちは自分たちが4年間学んだこの高梁の地に伝わる、本物の作品を前にして、改めて町の歴史や寺院について勉強しました。まず修復作品をじっくりと観察して調査記録をとり、修復処置を単なる手仕事としてとらえるのではなく、美術史的な考え方と保存科学的な視点に基づいて、学生たちが主体的に修復設計書を作成して保存修復を進めました。すると、いくつかの情報を得ることが出来ました。

税金投入が継続されている同公団がどのような方向に進むか注目されます。◆外部有識者を交え、検討委員会が設置され、行政へのチェックがなされ、民主主義が担保されていると感じがちです。委員の職歴や、社



「順位」が形成される、一部の委員の発言に沿った

【佐藤慶】